

「居場所」(安心できる人)を規定する要因 ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討

著者	岡村 季光, 豊田 弘司
雑誌名	奈良教育大学紀要. 人文・社会科学
巻	65
号	1
ページ	27-34
発行年	2016-11-30
その他のタイトル	Determinants of Ibasho (The person who eases one's mind): Investigation by Assessments about Time Spent Alone and Adult Attachment Style
URL	http://hdl.handle.net/10105/11031

「居場所」(安心できる人)を規定する要因

—ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討—

岡村季光 奈良学園大学
豊田弘司 奈良教育大学学校教育講座 (心理学)

Determinants of *Ibasho* (The person who eases one's mind): Investigation by Assessments about *Time Spent Alone* and Adult Attachment Style

Toshimitsu OKAMURA

(Naragakuen University)

Hiroshi TOYOTA

(Department of Psychology, Nara University of Education)

Abstract

The purpose of the present study is to examine the relationships among the degree of feeling at ease to the person who eases one's mind, the assessments about *time* spent alone or with others, and adult attachment styles. The participants were 156 undergraduates. They were asked to respond to each item of questionnaire. The main results were as follows: 1) "Anxiety" predicted the degree of feeling at ease to *time spent* with mother for male and females, 2) Both "Loneliness/Anxiety" and "Avoidance" predicted the degree of feeling at ease to *time spent alone* for male, whereas for females only the latter did. 3) "Avoidance" predicted the degree of feeling at ease to *time spent* with current friend for males, whereas for females "Anxiety" did. These results were interpreted as showing that the assessments about *time spent alone* or with others and adult attachment style determined the degree of feeling at ease to the person who eases one's mind. Further tasks to be examined were discussed in terms of *Ibasho* (person who eases one's mind).

キーワード：「居場所」(安心できる人),
ひとりで過ごす感情・評価,
成人愛着スタイル

Key Words: *Ibasho* (The person who eases one's
mind)
Assessments about *Time Spent Alone*
Adult Attachment Style

1. はじめに

青年期にとって、居場所があると感じることは適応を規定する重要な要因である。文部省中学校課 (1992) は、他者との相互作用により「今、ここにいる自分」を確認し、「自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所」である「心の居場所」が重要であると提言している。

豊田・岡村 (2001) は、これまでの居場所に関する先行研究において、居場所と認知される要因として「精神的安定」(杉本・庄司, 2007) が中核であること (中谷,

2011), 「安らぎを覚えたり、ほっとできるところ」(矢作, 2005) が重視されていることから、「居場所」を「安心していただける場所」と定義した。また、「居場所」は「時間 (安心できる時)」、「空間 (安心できる場所)」及び「人間 (安心できる人)」という3つの要素があり、小沢 (2000, 2002) の指摘から、「居場所」の構造は「時間」、「空間」及び「人間」の要因は並列的ではなく、人との関係が基礎になり、そこに時間・空間の要因が入ってくるのではないかと考えられた。

「安心できる人」という選択に関しては、その被選択者の上位に「自分ひとり」「母親」「友人」が挙げられて

いる(豊田・岡村, 2001)。そして、その選択のパターンを数量化Ⅲ類で分析した結果、“自分”群、“家族”群、“友人・恋人”群に分類されることが明らかになった(岡村・豊田, 2004; Okamura, 2008)。また、“自分”群は他の2群と比して対人関係の認識(豊田・岡村, 2002)や自分自身の捉え方(岡村・豊田, 2002)において差異があることが明らかとなっている。

上述したように、居場所は安心できる感覚が重視されてきたが、安心できる感覚という点において、類似する概念としてアタッチメント(愛着)がある。Bowlby(1977)は、アタッチメントを「ある特定の他者に対して強い結び付きを形成する人間の傾向」と定義した(金政, 2003)。アタッチメントの特徴として、個体がある危機的状况に接し、あるいはまた、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への近接を通じて、主観的な安全の感覚(felt security)を回復・維持しようとする傾性(数井・遠藤, 2005)である。個体にとって主要なアタッチメント対象は、危機が生じた際に逃げ込み保護を求める“確実な避難所(safe haven)”であると同時に、ひとたび個体の情動が静穏化した際には、今度は、そこを拠点に外界に積極的に出ていくための“安全基地(secure base)”として機能することになる(遠藤, 2007)。また、Bowlby(1969/1982, 1973, 1980)は、自己や他者及び関係性一般に対して個体が抱く主観的確信やイメージを、アタッチメントに関する“内的作業モデル(internal working model)”という術語を持って概念化した。この内的作業モデルは、心的な表象として、人の生涯に亘るパーソナリティ発達やその適応性を考える上で、とりわけ重要であるという認識を有していた(遠藤, 2007)。

乳幼児期では、表象に内在化されたアタッチメント対象への期待や信念は、個体とアタッチメント対象間(e.g. 幼児と養育者間)の相互作用における行動パターンとして表出される(金政, 2003)。Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall(1978)は、幼児に母親と見知らぬ人との分離と再会を経験させ、幼児の反応における行動パターンを見いだした。このパターンが愛着スタイルであり、安定型(secure; B type)、回避型(avoidant; A type)及びアンビバレント型(ambivalent; C type)に分けられた(後に、Main & Solomon(1990)により無秩序型(disorganized; D type)が加わる)。このような乳幼児期における愛着スタイルの違いは、上述した個人内表象としての内的作業モデルを介在要因として、青年期以降の個人の対人関係様式や社会的な適応性の発達の違いに影響を及ぼすとされている(金政, 2003)。

上述の通り、アタッチメントの概念は本研究における「居場所」(安心できる人)のそれとは近いものがあるが、他者とのかわりが自明であるか否かという点において

相違がみられる。すなわち、「居場所」(安心できる人)は“自分ひとり”という想定もあるのに対し、アタッチメントの概念にはない。しかし、「居場所」(安心できる人)とアタッチメントのパターンである愛着スタイルの関連を検討することは意義深いであろう。また、これまでの研究(例えば豊田・大賀・岡村, 2007)は、適応の指標である変数(孤独感等)を「安心できる人」の選択がどの程度予測できるかという検討を行った。一方、「安心できる人」を予測する変数は未だ十分な検討はされていない。

岡村・豊田(印刷中)は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し、成人を対象とした愛着スタイルを測定する質問紙(Adult Attachment Questionnaire; AAQ)を用いて、「居場所」における安心できる程度の評定に与える影響を検討した。その結果、男子において安定型が“自分ひとり”の評定に、アンビバレント型が“親”のそれに、それぞれ予測変数として有意であることが明らかとなった。また、女子においてアンビバレント型が“自分ひとり”の評定に、回避型が安心できる人すべての評定に、それぞれ予測変数として有意であることが明らかとなった。しかし、安心できる人の評定において、父親と母親を合わせて“親”とするなど、愛着スタイルが安心できる人のどの対象に影響を及ぼしているのか、詳細は明らかではない。また、岡村・豊田(印刷中)で用いた尺度はAinsworth, *et al.*(1978)による幼児の3つの愛着スタイルにもとづき構成された多項目式の3カテゴリー尺度(戸田, 1988)であり、近年盛んに研究が進められている多項目式の2次元(“見捨てられ不安”“親密性の回避”)・4カテゴリー(“安定”“とらわれ”“恐れ”“拒絶”)尺度も検討する必要がある。

そこで、本研究の第1の目的は、「居場所」として、“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”という場面を想定し、安心できる程度の評定に与える影響を多項目式の2次元AAQ尺度で検討することである。岡村・豊田(印刷中)は、男子において安定型とアンビバレント型が、女子においてアンビバレント型と回避型が安心できる程度に対する予測変数として有意であった。3カテゴリー尺度と2次元・4カテゴリー尺度の関連は中尾・加藤(2003)によりFig.1の区分が示されている。上述の関係から、本研究では、男子において“親密性の回避”が、女子において“見捨てられ不安”が居場所(安心できる人)への安心できる程度に対する有意な予測変数となることが予想される。

また、多項目式の2次元AAQ尺度において、“見捨てられ不安”は自己観と、“親密性の回避”は他者観とそれぞれ関連している(中尾・加藤, 2003)。また、各次元の傾向が高い場合はポジティブ、低い場合はネガティブ

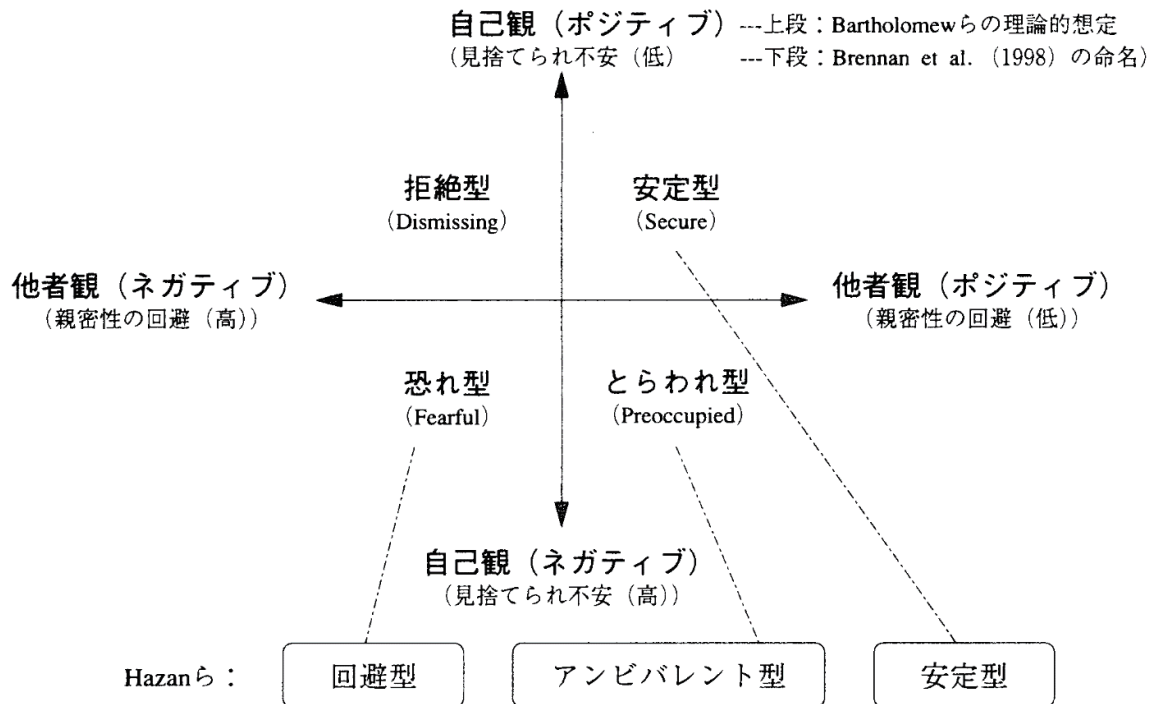


Fig.1 Bartholomew らの 4 カテゴリー愛着スタイルモデルと 3 カテゴリー愛着スタイル尺度の理論的対応性^{a)}

(Bartholomew & Horowitz (1991)と Brennan et al. (1998)をもとに中尾・加藤 (2003)が作成)

a)点線は, Bartholomew らの 4 カテゴリー愛着スタイルモデルと Hazan & Shaver (1987)

の 3 カテゴリー尺度の理論的対応性を示す (Bartholomew & Horowitz, 1991)。

に捉える傾向がある(中尾・加藤, 2003)と考えられている。岡村(2014)はひとりで過ごすことに関して否定的に捉えるだけでなく, 肯定的に捉えられる「ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度(ひとり感情・評価尺度)」を用いて, 安心できる人評定の関係を検討した。その結果, 「安心できる人」における「自分ひとり」の評定と「孤独・不安」は負の相関, 「充実・満足」は正の相関がみられた。これは「自分ひとり」の安心感を高く評定する者は, ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることを示唆しており, 自らをポジティブに捉えている現れとも言えよう。

そこで本研究の第2の目的は, 「居場所」における安心できる程度の評定, ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討する。本研究の仮説として「安心できる人」として「自分ひとり」の安心感を高く評定する者は, 他者との安心感を高く評定する者と比べひとりでいることを肯定的にとらえていると考えられる。すなわち, 「安心できる人」における「自分ひとり」の評定と「孤独・不安」は負の相関, 「充実・満足」は正の相関になることが予想される。また, 自己観に対応する「見捨てられ不安」は, 「孤独・不安」の間に正の相関, 「充実・満足」との間に負の相関が予想される。

2. 方法

2.1. 調査対象

調査対象者は近畿圏内に在住の大学生156名(男子96, 女子60)。平均年齢は19.18歳(SD1.53)であった。

2.2. 調査内容

2.2.1. 「安心できる人(居場所)」ごとの安心できる程度の評定

“あなたは以下の人と居る時に安心できますか。ここで用いている「安心できる」とは, ホットとする, 落ち着く等という意味です。”という教示を行い, “自分ひとり” “父親” “母親” “きょうだい” “現学校以前の友人” “現学校以降の友人” といる場面を設定した。そして, 各場面において安心できる程度を調べるために “5:とても安心できる” から “1:あまり安心できない” の5件法尺度を設定した。

2.2.2. ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度(ひとり感情・評価尺度)

ひとりで過ごすことに関して, どのような感情や評価を行っているかを測定する尺度である。増淵(海野)(2014)によって開発された。“孤独・不安” 11項目(例

「ひとりの時間」はさみしい)，“自立・理想”8項目(例友達と一緒になくても行動できるようになりたい)，“充実・満足”4項目(例「ひとりの時間」を有効に使っていると思う)，“孤絶願望”3項目(例 できることなら、だれもいないところに住みたい)の計26項目からなっている。各項目について“6:とてもそう思う”から“1:まったく思わない”の6件法尺度を設定した。

2.2.3. ECR-GO

一般他者を想定した親密な対人関係全般の中で現れる愛着スタイルを測定するための多項目式尺度である。中尾・加藤(2004)によって開発された。成人の愛着スタイルを構成する次元として，“見捨てられ不安”18項目(例 私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する)と“親密性の回避”12項目(例 私は人とあまりに親密になることがどちらかというとき好きではない)の計30項目からなっている。各項目に対して，“7:非常によく当てはまる”から“1:全く当てはまらない”の7件法尺度が設定された。なお、これらの項目はA3判用紙に印刷された。

2.3. 調査手続

第1著者の授業終了後に上述の調査用紙を配布し、以下に示す調査が集団的に実施された。

2.3.1. 「安心できる人(居場所)」ごとの安心できる程度に関する調査

2.2.1.に記述した調査項目について，“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”という場面においてそれぞれ“5:とても安心できる”から“1:あまり安心できない”の5件法で行った。

2.3.2. ひとり感情・評価尺度による調査

2.2.2.に記述した調査項目について“6:とてもそう思う”から“1:まったく思わない”の6件法で行った。

2.3.3. ECR-GOによる調査

2.2.3.に記述した調査項目について“7:非常によく当てはまる”から“1:全く当てはまらない”の7件法で行った。

なお、調査手続においては倫理的配慮を行った。具体的には、調査用紙冒頭に当該調査の内容に関しては授業とは関係ないこと、結果の処理は全て統計的に処理され個人を特定する形で公表しないことを明記し、調査実施前にも口頭で上述の説明を行ったうえで、調査への回答は自由意志であり調査に拒否しても個人の不利益になる

ことは決してないことを説明した。

3. 結果と考察

3.1. 「安心できる人(居場所)」ごとの安心できる程度の評定値

Table 1
「安心できる人(居場所)」ごとの安心できる程度に関する平均評定値性

		安心できる人					
		自分ひとり	父親	母親	きょうだい	以前友人	以降友人
男子	<i>M</i>	3.67	3.07	3.51	3.20	4.14	3.63
n=96	<i>SD</i>	1.04	1.21	1.11	1.24	1.03	1.05
女子	<i>M</i>	3.47	3.65	3.83	3.57	4.13	3.77
n=60	<i>SD</i>	1.14	1.18	1.08	1.05	1.07	.98
全体	<i>M</i>	3.59	3.29	3.63	3.34	4.13	3.68
n=156	<i>SD</i>	1.08	1.22	1.11	1.18	1.04	1.02

安心できる人ごとに集計した安心できる程度に関する評定値の平均が、Table 1に示されている。2(性:男・女)×6(場面:“自分ひとり”“父親”“母親”“きょうだい”“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”)の2要因分散分析を行った結果、性の主効果は有意ではなかったが($F_{(1,154)}=2.98$)、「安心できる人」の主効果($F_{(5,770)}=13.68$, $p<.001$, $\eta^2=.08$)及び交互作用($F_{(5,770)}=3.35$, $p<.01$, $\eta^2=.02$)が有意であった。単純主効果検定の結果、男子においては“現学校以前の友人”>“自分ひとり”=“母”=“現学校以降の友人”>“父親”=“きょうだい”の順に評定値が高かった。女子においては“自分ひとり”及び“きょうだい”の場面が、“現学校以前の友人”より評定値が低かった。

“現学校以前の友人”の評定値が高いという結果は、調査方法に違いがあるものの、豊田・岡村(2001)のそれとは異なる。しかし、和田(2001)は、入学6か月後に行った調査において、本研究の“現学校以前の友人”に相当する旧友人の方が“現学校以降の友人”に相当する新友人より親密であること、旧友人と新友人は相補的

Table 2 ECR-GOとひとり感情・評価の相関(*r*)

	見捨て不安	親密回避	孤独不安	自立理想	充実満足	孤絶願望
見捨て不安		.24**	.51***	.35***	-.23*	.27**
親密回避	.18		.09	.15	.02	.42***
孤独不安	.39**	.04		.17	-.40***	-.07
自立理想	.03	-.05	.09		.22*	.13
充実満足	-.22	-.33*	-.47***	.26		.08
孤絶願望	.12	.35**	-.31*	.10	-.01	

右上が男子(n=96)、左下が女子(n=60)

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table 3 安心できる程度評定値と各尺度得点の相関

	安心できる人					
	自分ひとり	父親	母親	きょうだい	以前友人	以降友人
(男子)						
見捨てられ不安	-.17	-.30**	-.27**	-.20	-.05	.06
親密回避	.11	-.24*	-.06	-.18	-.17	-.27**
孤独不安	-.54***	-.05	-.22*	.02	-.04	-.07
自立理想	.06	-.14	.03	-.03	.16	.14
充実満足	.35***	-.01	.16	-.06	.03	.08
孤絶願望	.17	-.29**	-.10	-.09	-.24*	-.25*
(女子)						
見捨てられ不安	-.22	-.16*	-.32*	-.26	.07	-.25
親密回避	.12	-.06	-.18	.08	.03	-.29*
孤独不安	-.42**	-.09	-.16	-.02	-.06	.16
自立理想	-.08	.10	.14	.09	.06	.00
充実満足	.15	-.03	.24	.21	-.07	.03
孤絶願望	.19	-.08	-.19	-.05	.12	-.35**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

な機能を持っていることを明らかにした。上述の研究結果から、新しい友人関係がスタートする際に、先行する関係が消滅するわけではなく、同時進行的に関係が存在すること(渡辺, 2014)がうかがえる。

3.2. 安心できる程度の評定値と各尺度得点の相関 (r)

ひとり感情・評価得点とECR-GO得点の相関係数(r)を算出した結果がTable 2に示されている。男女ともに、“見捨てられ不安”と“孤独・不安”、“親密性の回避”と“孤絶願望”は正の相関であった。これは、人に対する見捨てられ不安と孤独感や不安感が関連しており、人とのつながりが切れてしまう不安がひとりで過ごす不安を高めるものと考えられる。一方、“孤独・不安”と“充実・満足”は負の相関であった。これは、ひとりで過ごすことに孤独感や不安を感じる者は、充実感や満足感を得ていないことが考えられる。増淵(海野)(2014)は、ひとり感情・評価尺度を作成する際に因子間相関を検討した結果、“孤独・不安”と“充実・満足”に中程度の負の相関を見だしており、本研究の結果はそれを追証するものと言えよう。

また、安心できる程度の評定値と各尺度の関係を調べるために、安心できる程度の評定値と、ひとり感情・評価得点及びECR-GO得点との相関係数(r)を算出した。その結果がTable 3に示されている。男女ともに、“自分ひとり”と“孤独・不安”は中程度の負の相関、“父親”及び“母親”と“見捨てられ不安”は有意な負の相関、“現学校以降の友人”と“親密性の回避”及び“孤絶願望”は弱い負の相関であった。すなわち、自分ひとりに安心を感じる者は、ひとりでいることに孤独感や不安感を感

じていないことが考えられる。また、親に安心を感じる者は、他者から見捨てられるという不安が低下することが示された。これらの結果は上述したアタッチメント理論から考えても妥当な結果と言えよう。さらに、現学校以降の友人への安心感は、他者への親密感と関連があることが明らかになった。本研究の結果は、友人に親密感を感じる事が、現在所属している学校において他者との関係における快適な生活のために必要であることがうかがえる。

男女別に検討した結果、男子において、“自分ひとり”と“充実・満足”は中程度の正の相関であった。ひとりでいることを志向する男子は、ひとりでいることに孤独感や不安感を感じていないだけではなく、充実感や満足感も得ていることが明らかになった。この結果は、男子は女子に比べひとりで過ごすことを求める傾向のあることを示唆している。

3.3. 安心できる人を規定する要因

上述したように、男女ともに、“自分ひとり”と“孤独・不安”は中程度の負の相関、“父親”及び“母親”と“見捨てられ不安”は有意な負の相関、“現学校以降の友人”と“親密性の回避”及び“孤絶願望”は弱い負の相関であった。それ故、ひとり感情・評価得点及びECR-GO得点を予測変数、安心できる程度を目的変数とする重回帰分析を安心できる人ごとに行った。その結果がTable 4に示されている。

“自分ひとり”において、男子は“親密回避”(β=.19)及び“孤独・不安”(β=-.54)が予測変数として有意(R²=.31)であった。一方、女子は、“孤独・不安”のみ有意(β=-.42, R²=.18)であった。男女共通して、自分ひとりでいることに不安や孤独を感じないこと、さらに、男子は、他者と心理的に距離をおくことが、“自分ひとり”を居場所と感じる感覚を高めていることが明らかになった。

“母親”において、男子(β=-.24, R²=.06)、女子(β=-.32, R²=.10)ともに“見捨てられ不安”が予測変数として有意であった。一方、“父親”において、男子のみ“見捨てられ不安”(β=-.23)と“孤絶願望”(β=-.24)が予測変数として有意(R²=.14)であった。男女ともに、他者とのつながりが母親への安心感を高めており、さらに男子においては父親への安心感も高めることが明らかになった。

友人においては、男女により結果が異なった。すなわち、“現学校以降の友人”においては、男子は“親密性の回避”(β=-.26, R²=.07)が予測変数として有意であった。一方、女子は“見捨てられ不安”(β=-.29)と“孤絶願望”(β=-.32)が予測変数として有意(R²=.21)であった。“現学校以前の友人”においては、男子は、“孤絶願

Table 4 安心できる人評定ごとの回帰分析

	安心できる人											
	自分ひとり		父親		母親		きょうだい		現学校以前の友人		現学校以降の友人	
	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t	β	t
(男子)												
見捨て不安			-0.23	-2.17*	-0.24	-2.28*						
親密回避	0.19	2.02*					-0.22	-2.06*			-0.26	-2.41*
孤独不安	-0.54	-5.84***										
孤絶願望			-0.24	-2.22*					-0.22	-2.10*		
R^2	0.31		0.14		0.06		0.05		0.05		0.07	
F	18.71	***	6.68	**	5.2	*	4.23	*	4.4	*	5.78	*
(女子)												
見捨て不安					-0.32	-2.47*	-0.29	-2.27*			-0.29	-2.32*
孤独不安	-0.42	-3.37***										
孤絶願望											-0.32	-2.54*
R^2	0.18				0.1		0.09				0.21	
F	11.37	**			6.1	*	5.15	*			6.74	**

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

望”が予測変数として有意 ($\beta = -.22, R^2 = .05$) であった。男子においては他者に自己開示するなどして親密性を高めること、女子においては他者と関係が切れることはないという安心感が、現在所属している学校の友人への安心感を高めていることが明らかになった。また、他者と関係を切りたくないという願望は、男子において以前の友人への安心感に影響を与えているのに対し、女子においては現在所属している学校の友人への安心感に影響を与えていることが明らかとなった。

本研究では、男子において“親密性の回避”が、女子において“見捨てられ不安”が居場所（安心できる人）への安心できる程度に対する有意な予測変数となると予想した。本研究の結果から、男子では“自分ひとり”と“現学校以前の友人”、女子では“現学校以降の友人”に対する安心できる程度の予測において認められたことになった。

3.4. 本研究の結論と今後の課題

本研究は、対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し、「居場所」における安心できる程度の評定値、ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果、1) ひとり感情・評価得点とECR-GO得点の関係において、男女ともに、“見捨てられ不安”と“孤独・不安”、“親密性の回避”と“孤絶願望”は正の相関であった。2) 安心できる人評定と各尺度の関係において、男女ともに、“自分ひとり”と“孤独・不安”は中程度の負の相関、“父親”及び“母親”と“見捨てられ不安”は有意な負の相関、“現学校以降の友人”と

“親密性の回避”及び“孤絶願望”は弱い負の相関であった。3) 安心できる人を規定する要因として、男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”、“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また、“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”、女子は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。

本研究の最も意義のある結果は、居場所（安心できる人を規定する要因を明らかにできたことである。ただし、男女別に重回帰分析を行い、男女差を見いだしたが、サンプル数が少ない可能性はある。この点については、さらに追加データの分析が必要である。

また、それ以外に居場所に関する研究の意義に関連して、今後の課題として3点を挙げる。まず第1に、安心できる程度の評定に関して、普段の平常時とあわせ、危機的な状況に設定を検討することが考えられる。中尾・加藤（2001）は、愛着行動を「ネガティブ感情喚起場面において、そのネガティブ感情を解消するために、他者と何らかのかかわりを持つこと、またはその意図にもとづき実際のやりとりを行うこと」と定義している。それ故、平常時よりもネガティブな感情が喚起される場面において安心できる人への安心できる程度の評定を行うことも必要と考えられる。

第2に、安心できる人を規定する要因に何らかの媒介要因が介在している可能性を検討することである。例えば、本研究において、安心できる人で“自分ひとり”の評定は、ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”が予測変数として有意であった。しかし、豊田・大賀・岡村（2007）は「安心できる人」の選択による孤独感得点は情動知能

(Toyota, Morita, & Takšić, 2007)の高低により影響を受けていることを明らかにした。この場合は、情動知能が媒介変数として機能していることになるだろう。今後はどのような要因が媒介変数として安心できる人の評定に機能しているのかを検討することが求められる。

第3に、安定型、すなわち“見捨てられ不安”“親密性の回避”がともに低いことが望ましいという暗黙の前提は妥当か否かを検討することである。遠藤(2008)は、回避型やとらわれ・アンビバレント型なども、ある特定の条件下においては十分に高い機能性を有するという見方が一般的であることを指摘している。今後は、遠藤(2008)が指摘するように、暗黙の仮説設定の枠組みから脱し、回避型やとらわれ型などが、いかなる条件の場合にどのような適応性を発揮し得るのかを検証していくことが求められる。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. S., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. (1982). *Attachment and Loss, Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books. (Original work published 1969)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol.2: Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. I. Aetiology and psychopathology in the light of attachment theory *The British Journal of Psychiatry*, **130**, 201-210.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss, Vol. 3: Loss: Sadness and depression*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships* (pp. 46-76). New York: Guilford Press.
- 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する 数井みゆき・遠藤利彦(編著) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 (pp.1-58)
- 遠藤利彦 (2008). 監訳者まえがき W・スティーブン・ローズ&ジェフリー・A・シンプソン(編) 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・申崎真志(監訳) 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房 (pp.i-vii)
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 金政祐司 (2003). 成人の愛着スタイル研究の外観と今後の展望 対人社会心理学研究, **3**, 73-84.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005). アタッチメント：生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- Main, M., & Solomon, J. (1990). Procedures for identifying infants as disorganized/disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M.T. Greenberg, D. Cicchetti & E.M. Cummings, *Attachment during the preschool years: Theory, research and intervention*. (pp.121-160) Chicago: University of Chicago Press.
- 増淵(海野)裕子 (2014). 大学生における「ひとりの時間」の検討および自我同一性との関連 青年心理学研究, **25**(2), 105-123.
- 文部省中学校課 (1992). 登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して(学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会月報, **44**, 25-29.
- 中尾達馬・加藤和生 (2001). 成人愛着行動とはどのようなものか?—女子大学生の自由記述の内容分析を通して— 九州大学心理学研究, **2**, 99-106.
- 中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか? 九州大学心理学研究, **4**, 57-66.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- 中谷陽輔 (2011). 居場所を感じる自己 榎本博明(編著) 自己心理学の最先端：自己の構造と機能を科学する あいり出版 (pp.141-151).
- Okamura, T. (2008). Classification of Ibasho “Person who eases your mind” in female undergraduates, Poster presented at XXIX International Congress of Psychology, Berlin, July 21-25.
- 岡村季光 (2014). 「居場所」(安心できる人)とひとりで過ごす感情・評価の関係 奈良学園大学研究紀要, **1**, 191-197.
- 岡村季光・豊田弘司 (2002). 大学生における『居場所』の個人差の検討(2) 自己意識及びエゴグラムとの関係から～日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 321.
- 岡村季光・豊田弘司 (2004). 青年期後期の「安心できる人」を類型化する試み 日本発達心理学会第15回大会発表論文集 **79**.
- 岡村季光・豊田弘司(印刷中). 「居場所」(安心できる人)を規定する要因 —成人愛着スタイルによる検討— 奈良学園大学紀要
- 小沢一仁 (2000). 自己理解・アイデンティティ・居場所 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編, **23**(2), 94-106.
- 小沢一仁 (2002). 居場所とアイデンティティを現象学的アプローチによって捉える試み 東京工芸大学工学部紀要 人文・社会編, **25**(2), 30-40.
- 杉本希映・庄司一子 (2007). 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, **40**, 81-91.
- 戸田弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 27.
- Toyota, H., Morita, T., & Takšić, V. (2007). Development of a Japanese version of the emotional skills and competence questionnaire. *Perceptual and Motor Skills*, **105**, 469-47.
- 豊田弘司・大賀香織・岡村季光 (2007). 居場所(「安心できる人」と情動知能が孤独感に及ぼす効果 奈良教育大学紀要, **56**, 41-45.
- 豊田弘司・岡村季光 (2001). 大学生における『居場所』 奈良教育大学教育研究所紀要, **37**, 37-42.
- 豊田弘司・岡村季光 (2002). 大学生における『居場所』の個人差の検討(1) 対人関係の認識の関係から～日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 320.
- 和田 実 (2001). 性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響 心理学研究, **72**, 186-194.
- 渡辺 舞 (2014). 大学の友人関係は変化するか? —大学4年

間の追跡的検討による大学適応感との関連について— 北
星学園大学大学院論集, 5, 67-81.

矢作博美 (2005). 子ども・若者における「居場所」に関する研
究の概観 聖マリアンナ医学研究誌, 5, 121-126.